渡辺淳一

遠き落日

上

角川書店

定価940円

0093-872253-0946(0)

渡辺淳一

遠き落日 上

遠き落日（上）

1979年9月10日　初版発行
1980年1月25日　7版発行

著者　渡辺淳一
発行者　角川春樹
発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話03(265)7111(大代表)　〒102
振替東京3-195208
印刷・製本　大日本印刷
Printed in Japan　0093-872253-0946(0)
©Junichi Watanabe, 1979
落丁・乱丁本はお取替えいたします

遠き落日（上）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

装丁・原万千子

目次

序　章　メリダにて　五
第一章　猪苗代　三〇
第二章　会津若松　六八
第三章　芝伊皿子　八一
第四章　本郷時代　九九
第五章　北里研究所　一二六
第六章　横浜検疫所　一五八
第七章　清国・牛荘　一六九
第八章　神田三崎町　一七九
第九章　旅立ち　二〇二
第十章　フィラデルフィア　二一一

序章　メリダにて

一九七四年八月二日、私はメキシコの首都メキシコシティから、カリブ海にとび出したユカタン半島の突端にある街、メリダへ向けて飛び立った。飛行機は翼に黒い鷲印のついたメキシコ航空のボーイング727である。

この航路はメキシコシティとユカタン半島を結ぶローカル線で、いつもは比較的空いているらしいが、このときは夏のバカンスのせいもあって満席であった。黒い大きな瞳、整った鼻、濃い口髭、メキシコ人特有の人懐っこい笑いと、騒々しさをのせて、飛行機は一路ユカタン半島へ向かう。

飛行場を飛び立ち、急上昇して夏の雲をつき抜けるとすぐ、進行方向の右手に、一つだけ、雲の上に頭を出した山が見えた。標高五四五二メートル、ポポカテペトル山だと同行の日系二世の山田氏が説明してくれる。

メキシコは全体に山地が多く、メキシコシティそのものも二二四〇メートルの高地にある。私はその山を見ながら、五四五二メートルから二二四〇を引けば、三二〇〇余になるから、丁度日本人が富士山を見上げる感じになるのかと考えた。実際、その山の姿は富士山に似ていた。裾野のほうはともかく、雲から出た部分は、見事な二等辺三角形で、その山頂に純白の雪を戴いている。富士山を思い出したせ

いか、私はこの山が、メキシコで最も高いのだと思っていたが、さらに西へすすみ、ポポカテペトルが視界のうしろに退るころ、それと入れ替りに同じくらいか、あるいはそれより高いと思われる山が、続続と雲の上に現われてきた。これらの山はポポカテペトルのように整った容姿ではないが、やはり山頂は雪を戴き、そのなかで最も高いのが、標高五六七五メートルのオリサバ山である。

この山が右手後方に移動すると、やがてメキシコ湾の青い海岸線が見えてくる。もっともメキシコの西岸と、ユカタン半島の東岸で囲まれたこの一帯は、正しくはカンペーシュ湾と呼ばれ、いわばメキシコ湾の支湾である。

さすがに南国の海は青い。このまま海に没すれば、すべてが紺碧に染められるかと思うほどの青さである。

メキシコシティからメリダまで一時間半、このローカル線は、カンペーシュ湾上を飛ぶとき、お茶のサーヴィスがある。私は午前のコーヒーを飲みながら、しばらくカリブ海を見下していたが、やがて青すぎる原色に疲れて目をそらした。そのままシートに背を凭せ、慣れぬ英字新聞を拾い読みしていると、ようやく行く手にユカタン半島の白い海岸線が見えてきた。

飛行機はこの海岸線をこえるとすぐ左へ迂回する。メリダは海岸線より約二〇キロ内陸に入ったところにある。旋回を終えると、それまでの青一色に変って緑と黄色の野面が急に迫ってきた。やがて着陸である。

タラップが取りつけられ、空港に降り立った瞬間、私は明るすぎる陽に、一瞬、たじろいだ。

まさしく、ここは南の国である。地が反りかえったような平原の果てに、積乱雲が立ちのぼり、見はるかす彼方まで陽が無数の粒子となって降り注いでいる。

いま真昼間の平原を支配するのは太陽だけで、地も空も陽の下で、息をつめたように静まりかえって

いる。

私達はタラップを降りると灼けつくコンクリートの上を、ゆっくりと空港ビルのほうに歩いた。おそらく、日本の、どの地方空港のビルより大きいと思われるその建物も、広い野のなかではさほど大きいとは感じない。私達はそのガラスの多い近代的なビルを出ると、すぐ前に並んでいたタクシーに乗った。

「メリダの街へ」

窓ごしにいうと、豊かな口髭を生やし一〇〇キロはあろうかという巨漢の運転手が、愛想よくうなずいてドアを開けてくれる。メリダで最もいい車は個人タクシーの車だときいていたが、私達の乗ったのも、リムジンの赤と白のツウトンカラーである。

「イッツ、ホット」運転手は私達に英語で話しかけてくる。

だが正直なところ、陽の明るさには戸惑いはしたが、暑さはさほど感じない。カークーラーはいらず、むしろ窓を明けると風が心地よい。温度は高いのだが空気が乾いている。むろん標高二二四〇メートルのメキシコシティとはくらぶべくもないが、それでも東京の夏のような、湿気はない。

車は舗装された路をひたすらまっすぐすすむ。左右は平坦な野が続き、ところどころにサイバル麻を栽培している畑が見える。

空港からメリダの街まで、三十分の距離である。やがて道の両脇に、石でできた民家が現れ、それが次第に白い壁のように続き、いつか気がつくとメリダの街に入っている。

この街はユカタン半島の北岸に近く、かつてはスペインに支配され、「チョルラ・ブランカ」と呼ばれた。

チョルラ・ブランカとはスペイン語で「白い街」の意味だが、この言葉ほど、この街の印象をいい当てているものはない。圧倒的な太陽の下、街は白い石の家と乾いた無人の道だけが続いている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

街の入口には、東西南北に向けて、四つの門があり、それらはいずれも、かつての主要道路への関門であった。この門のなかがいわゆる旧市内で、門に続く道の左右は、低い石の家が並び、その前に電柱が明るい空に向けて立っている。隣家と境のない石の続きは、倉庫のきわか、石塀に囲まれた道を行くような錯覚にとらわれる。

私達がこの街に入ったのは、正午を少し廻っていたが、ところどころ、石壁のわきに古びた車が止まり、自転車が寄せかけられ、開け放たれた窓には、レースのカーテンが揺れているだけで人影はほとんどなかった。たまに動くのは、大股に道を横切る白シャツの男と、石の壁に落書きをしている子供だけである。太陽が猖獗をきわめるいま、人々は家のなかか樹蔭で休み、白い街は息を潜めてひたすら陽が傾くのを待っていた。

この街に、野口英世が訪れたのは、いまから五十五年前の一九一九年の暮れである。このとき、野口はニューヨーク、ロックフェラー研究所の主任研究員で、その春、黄熱病原体を発見した功績により、米国医学会から銀牌を贈られたばかりであった。

この年に、野口がこの街を訪れた理由は、もとより黄熱病の研究のためであった。

当時、この白い街はまだ黄熱病の恐怖に沈んでいた。

黄熱病（イエローフィバー）といっても、いまのわれわれにはぴんとこないが、かつてペスト、天然痘、コレラなどとともに、世界を震撼させた悪性伝染病の一つである。

この病気は字のごとく全身が黄色くなり、高熱が出て死に至る。全身が黄色くなるのは、末期に肝臓が侵され、急性肝炎を起して黄疸をきたすからである。感染すると同時に、真夏でも、歯が合わぬほどの震えがきて、たちまち腎臓と肝臓が侵され、最後は呼吸困難で息絶える。発病から死までは、三、四

日か、長くても五、六日といわれ、一応一週間、もちこたえた者だけ辛うじて生き残る。その致命率は、土地によって四〇パーセントとも、七〇パーセントともいわれていた。

白いメリダの街は、野口が来たときも、いまのように太陽の下で静まりかえり、ときに黄熱病患者の断末魔を告げる喚きと、家族の泣き声だけが、石壁の家から洩れていたのかもしれない。

私はここに来る前、ニューヨークにいて、そこからイースタン航空でメキシコシティに入り、メリダに着いた。その間、実際の飛行時間は七時間余りであった。その行程を野口は五十五年前、汽車で走りづめで一週間かかってきた。だがこの間、野口は列車の寝台つきのコンパートメントに入ったまま外へ出なかった。

車掌は、野口がメキシコのメリダまで行く切符を持っていることは知っていたが、コンパートメントのドアが閉められたままなので、心配になり、ドアをノックしてみた。

「なんだ」

数度ドアをノックしたところで、ようやく返事が戻ってくる。

「あのう、なにかご用はないかと思いまして」

「ない」

それで野口が生きていることだけはたしかめられたが、なかでなにをしているかは、まったくわからない。ただこの小柄な乗客がたまに停車する駅で、売店から大量の食糧を買いこむのが見られたが、その姿は鼻の下にちょび髭を生やし、髪はぼさぼさにして、ズボンを吊りバンドで支え、いかにも風采のあがらない東洋人だった。

ともかく、こうして野口がメリダに着いたのは十二月の六日であった。

年の暮れとはいえ、南国の街は相変らず陽が輝き、温度は三十度をこしていた。ここで野口が泊ったホテルは、ホテル・レホルマといい、いまも東門へ通じる繁華街の一角に残っている。

このホテルは丁度、通りの四つ角に面し、表の一部は、絵葉書など売る小さな売店になっているが、ホテルのフロントは、南の通りに面した右手から入ったところにある。この街の建物のほとんどがそうであるように、このホテルもスペイン風の凝った装飾が入口や窓にあしらわれている。二階建てで、外から見ると、さほど大きくないが、なかに入るとスペイン風の中庭が二階まで吹き抜け、廻廊とまわりの部屋が、それをとり囲む形で並んでいる。庭を囲む廻廊の床は、グリーンに、オレンジの菱形を並べた派手な縞模様で、中庭には檳榔樹や浜木綿など熱帯植物が茂り、中央の鳥籠に黄色と赤の尾をもった鳥が一羽、退屈そうにとまっている。さらに一階の中庭のまわりには、アームチェアやスツールが置かれ、天井のガラスを通して降りそそぐ陽の下で休息できるようになっている。

客室は入口に近くベッドが置かれ、それと反対側に木の机と備えつけの木製の洋服箪笥があるだけで、日本の一般のホテルのシングルの大きさと変らない。

ホテルの経営者の妻だという太った女性の話では、この街の最も古いホテルの一つで、野口が訪れた一九二〇年ごろも、ホテルはこの場所にあり、床や階段の一部を除いて、全体の形や部屋のつくりは当時と少しも変っていないらしい。

「われわれは日本から来たのだけど、ドクター・ノグチを知っていますか」

「ノグチ？……さあ」

「イエローフィバーの病原菌を発見した有名な医者だけど」

「おお、イエローフィバーは怖い。母からきいたことがあります」

彼女はそういって、首をすくめた。

野口の名はともかく、黄熱の怖さはこの四十代の女性にも浸透しているらしい。

五十五年前、野口はこのホテルに着くと、その夜、町の公会堂にメリダの医師、医療関係者の全員を集めて次のような演説をした。

「私は昨年、黄熱が猛威を揮うエクアドルに出張し、黄熱病患者をつぶさに見、調べて、その血清のなかから、黄熱の病原体であるレプトスピラ・イクテロイデスを発見しました。一九〇〇年、アメリカ医学界がこの黄熱に挑戦して以来、二十年間、多くの年月と莫大な研究費を投じて、なお不明であった病原菌を、私は幸運にも二か月の短時日で発見することができたのです。これで黄熱撲滅への第一歩は開かれ、あとはこの菌をたたく治療法を、考えればいいだけです。いままでの、やみくもの戦闘と違い、これからは目標がきまった、正攻法の攻撃がはじめられるのです。

私はいま、これの治療法だけでなく、予防ワクチンまで完成させたいと願っています。これさえ出来れば、一本の注射で、黄熱にかかる人は一人もいなくなるはずです。黄熱という病気の名前は、この地球上から永遠に消え、あと十数年も経てば、黄熱という病気があったことさえ昔語りになってしまうのです。私がニューヨークから、夜を日についで駆けつけてきたのは、その平和で栄光ある未来を築きたいためです。そしてこのメリダの土地で、黄熱への人類の最初の勝利を高らかに誇りたいからです。

だがこの仕事は、私一人の努力では成し難いのです。この黄熱が跳梁を恣にしている、メリダの土地の、みなさん達の協力なしでは不可能です。

黄熱の撲滅と、人類の栄光ある未来のために、私はみなさんに心からお願いします。どうか、現在いる黄熱患者の一人一人から、血清を採って、私に送って下さい。その血清のなかには、間違いなく黄熱の病原体が入っているはずですが、私は怖れません。それらをとくに傷口などに触れないかぎり、感染

することはないと確信しているからです。
あなた方が必死なら、私も必死です。私がここにいる時間はかぎられていますが、その間、私は昼夜を分かたず、黄熱の研究に没頭するつもりです。
このメリダの街で、黄熱の研究を完成させ、このメリダが黄熱撲滅の歴史のなかで、輝かしい一ページを築くことを、私は信じて疑いません。
この研究が完成したら、私は私の名とともに、みなさんの惜しみない協力があったことを、論文の一ページにつけくわえることを忘れないでしょう」

野口は演説の上手い人であった。少し甲高い年齢よりは若い声で、抑揚をつけ、壇上で卓を叩き、のってくると全身を躍動させる。小柄だがエネルギッシュで、喋りはじめるとその小柄な体がひとまわり大きく見えた。

この五十五年前の演説をきいた人が、いまなおメリダの街に住んでいる。メリダのカレー街四十五番地に住む、ドクター・オトリイオ・ヴィラヌエヴァ氏である。
氏は大変な親日家で、かつて昭和四十年に玉川学園の故小原国芳氏の招きで日本に来たことがある。そのとき氏はもちろん野口英世の生家の、猪苗代・三城潟まで行っているが、同時に日本・メキシコ親善の功労者として、皇太子御夫妻、佐藤首相にも逢っている。現在八十五歳の高齢だが、なお矍鑠として杖一本で市内のどこにでも出向いていく。メリダまで行く日本人旅行者は少ないが、そのほとんどはこのヴィラヌエヴァ氏の世話を受けている。
今回の取材旅行で、私がニューヨークからメリダまで飛んだのも、この野口の演説をきき、黄熱の街

で実際に野口に接した生き証人に会うためであった。

ところでメリダにはヴィラヌエヴァ姓が意外に多い。私はあらかじめ、氏宛に、訪れる旨の手紙を出し、あとは住所と電話番号だけ書きとめてアメリカかメキシコシティに行ってから電話をすればいいと簡単に考えていた。だがいざ行ってみると、そんなに簡単なわけにはいかない。氏は高齢のためすでに医師を引退され、現在はメリダ大学で生物学を研究されている長女に家督を譲られている。日本式にいうと、悠々自適の生活というわけである。そのせいか、記していった電話番号が他のヴィラヌエヴァ氏の番号であったり、医師のヴィラヌエヴァ氏が他にいたりして、はっきりオトリイオ・ヴィラヌエヴァ氏その人に連絡がついたのは、メリダの街に着いてからだった。

ここでの私達のホテルは、モンテジオ・パレスホテルといって、メリダでは最も大きい近代的なホテルであった。もっとも大きいといっても、人口十八万の小さな街であるから、四階建てだが、前は檳榔樹の並ぶ三〇メートル幅の広い道路で、すぐ右手にはマヤ文化の遺産を内蔵する美術館がある。通りに面した家は、すべて広い庭と樹木に囲まれたスペイン風の高級住宅街であった。

ここに着いて目的のヴィラヌエヴァ氏に連絡がつくと、早速、カルロスという若い青年が駆けつけてきてくれた。カルロス君はメリダ大学の法科の学生だが、ヴィラヌエヴァ家とは親しく、ヴィラヌエヴァ氏の私設秘書のような役目をしているらしい。私達は、ホテル正面右手の、檳榔樹の陰になるレストランで、コーラを飲みながら彼とこれからの予定について話し合った。

カルロス君の話では、いまは真昼間で暑いからホテルで少し休んで、三時ごろヴィラヌエヴァ氏の家に来ないか、そこでいろいろ話をしよう、ということだった。暑いことは暑いものの私は、東京の夏ほどの不快感を覚えなかったが、メリダの人達はいまの時間、家か樹陰で休息するのが習慣なのかもしれなかった。そんなことを私達がカルロス君と話していると、五、六歳の少年が小さな木の台を持って私

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.